

# 保健体育教員養成課程における学習指導案作成と模擬授業の実践

## 一 「保健体育科教育法（陸上）」の取り組み一

木村華織・黒須雅弘\*

### 1. はじめに

本稿では、2018年度に開講された「保健体育科教育法（陸上）」の授業内容について報告するとともに、学習指導案作成時の学生たちのつまずきと本授業の学習効果を検討する。

2006年7月、中央教育審議会より「今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申）」<sup>1)</sup>が公表された。その中で、「教職課程の質的水準の向上」が示され、教職実践演習の新設・必修化や教育実習の改善、教職指導の充実等が求められた。2015年12月には「これからの学校教育をになう教員の資質向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」<sup>2)</sup>が出された。この答申では、生涯を通じた教師の資質向上を目指し、教員の養成・採用・研修を一体とした、包括的で持続可能な人材育成を見据えた提言がなされている。答申には「教員養成に関する課題」として以下4点があげられている。1) 教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修を行う段階であることを認識する、2) 実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させる、3) 教職課程の質保証・向上のため、全学的に教職課程を統括する組織の整備を促進させる、4) 学校現場の要望に柔軟に対応できるよう、また大学の独自性が発揮されやすい制度とするため教員養成カリキュラムの検討をする、という内容である。

教員養成課程をもつ大学では、中教審から出される様々な提言を考慮しつつ、また教育職員免許法改正を受けながら、大学の独自性を備えた教員養成カリキュラムの構築やシステムの制度化を図ってきた。その中で教職課程の必修科目である「教職実践演習」や「教科指導法」は、実践的指導力の基礎の育成および学校現場や教職を体験させる機会として位置づけられてきた。特に「教科指導法」は、専門教科に関わる指導力を身につけることが主たる目的となるため、授業内容に学習指導案作成や模擬授業を用いることが多い。

白石（2013）<sup>3)</sup>は、保健体育の教科指導法において、「よい体育授業」<sup>4)</sup>を実現するための実践的な能力を習得することを目的に、学習指導案作成と模擬授業を含む授業を展開した。その結果として、教科指導法においては教育実習時に指導教諭が教育実習生に対して行う学習指導案事前指導と同様に、授業実施前に十分な教材研究を行わせることと、対面での学習指導案の点検・指導は欠かせないものであると述べている。他方、算数・数学教員志望学生を対象に学習指導案作成能力向上に関する事例研究を行った秋田・斎藤（2010）<sup>5)</sup>は、学生が学習指導案を作成する場合、学習指導案の作成過程に模擬授業のような実践場面を導入し、教師役学生が自己の学習計画を生徒役学生の学習活動や成果と対比させて省察できるようにすることで、学習指導案作成力の向上が期待できるという。秋田の報告を受け渡部（2018）<sup>6)</sup>は、教育実習実施以前の段階で模擬授業のような実地に予備的な効果を確認できる機会を確保することに意味があるとしている。このように、実践的指導力を育成するための教科指導の学習プロセスにおいては、段階的かつ時間をかけた丁寧な個別指導が重要といえる。

\*東海学園大学スポーツ健康科学部

保健体育教員の養成課程をもつ本学スポーツ健康科学部（以下、本学部とする）においても、2015年度の教科指導法科目開講以降、担当者がそれぞれに授業改善を重ねてきた。本稿で取り上げる「保健体育科教育法（陸上）」もその一つであり、過年度の授業実践（黒須 2016、2017）<sup>7) 8)</sup>からは以下の3点が指摘されている。1) 学習指導案の作成において、受講者に何を学ばせたいのか具体的な学習目標が立案できないため“ただ行かせた”だけの活動内容になってしまう、2) 学生の多くは模擬授業を実施する上での教材研究とそれによって得られる教材理解が不足している、3) 模擬授業においては、生徒役となる学生数を段階的に増やすことが教育実習を控えた学生たちにとって有用な経験になる、である。以上のことを踏まえ、2018年度の授業では過年度の実践を踏襲した上で、白石の指摘する対面指導による学習指導案の点検・指導を学習プロセスのひとつに加え、授業を展開した。

## 2. 「保健体育科教育法（陸上）」について

### 2-1. 開講状況

本学部では、教職課程科目「教職に関する科目」のうち、教職免許法施行規則に定められた「各教科の指導法」として、全8科目（授業理論、体育理論、陸上競技、体操・器械運動、球技、武道、水泳、ダンス）が開講されている。いずれの科目も、基礎的指導力や授業運営能力の育成を目的としており、中学・高等学校の保健体育教員免許取得のための必修科目とされている。

「保健体育科教育法（陸上）」の開講時期は3年次の春学期であり、授業は2クラス編成を2名の教員で1クラスずつ担当している。本授業では、学習指導案作成と模擬授業を中心に授業を構成している。この他、免許取得希望者に対しては、1年次に「スポーツ方法学実習（陸上Ⅰ・Ⅱ）」が必修科目として開講されている。スポーツ方法学実習は学生自らが実践することで方法論や競技ルールを学ぶのに対し、保健体育科教育法は授業運営方法、指導方法を学ぶための科目として位置づけられ、体系的に陸上競技が学習できるよう設定されている。

### 2-2. 受講状況

本科目の過去3年間の履修者数は、2016年度92名（前半クラス41名、後半クラス51名）、2017年度96名（前半クラス52名、後半クラス44名）、2018年度97名（前半クラス43名、後半クラス54名）であり、例年100名弱の学生が教員免許取得を目指して履修している。ただし、履修期間中に免許取得を辞退する学生も少なからずいる。以降では、筆者が担当した2018年度の前半クラスを取り上げ報告する。

### 2-3. 授業スケジュール

表1に全15週の授業スケジュールを示した。2018年度は、模擬授業前の事前指導に重きを置き、基本的な指導法、測定方法、学習指導案作成方法について教授する時間を例年よりも1時間増やし、計3時間とした。1回目の授業では授業の進め方（本授業の活動内容、模擬授業の実施方法、模擬授業のグループ分け、模擬授業実施上の留意事項）について説明した後、導入（ウォーミングアップ）に関する実技指導を行った。2回目の授業では、陸上競技の各種目の測定方法、指導案の作成方法について教授し、3回目は実際に実技を行いながら授業運営および各種目の指導ポイントについて説明した。

4週目から8週目まで5週に渡り模擬授業1回目を行い、9週目に模擬授業1回目の振り返りと模擬授業2回目に向けた教材研究の時間を設け、模擬授業2回目（10-14週目）へと展開した。15週目は、模擬授業全体の振り返りと報告書の作成・提出方法について説明する時間とした。模擬授業は全員が最低2回は経験するようにした。

9週目の「模擬授業1回目の振り返り」では、授業担当教員（以下、担当教員とする）が模擬授業時

に記した教師役学生の模擬授業に対するコメント（43名分）をまとめた一覧表を受講者全員に配布し、自らの実践だけでなく他者の実践からも学べるようにした。

表1. 授業スケジュール

週数	日付	内容
1	4月11日	授業の進め方、実技指導
2	4月18日	計測方法、指導案作成方法
3	4月25日	各種目の指導に関する実技指導
4	5月2日	模擬授業_1回目-① A:リレー B:ハードル C:砲丸投
5	5月9日	模擬授業_1回目-② A:ハードル B:走幅跳 C:リレー
6	5月16日	模擬授業_1回目-③ A:走幅跳 B:ハードル C:走高跳
7	5月23日	模擬授業_1回目-④ A:走高跳 B:砲丸投 C:走幅跳
8	5月30日	模擬授業_1回目-⑤ A:砲丸投 B:リレー C:走高跳
9	6月6日	模擬授業1回目振り返り、2回目予告、教材研究
10	6月13日	模擬授業_2回目-① A:リレー B:ハードル C:走幅跳
11	6月20日	模擬授業_2回目-② A:走幅跳 B:ターボジャブ C:リレー
12	6月27日	模擬授業_2回目-③ A:ハードル B:リレー C:ターボジャブ
13	7月4日	模擬授業_2回目-④ A:ターボジャブ B:ハードル C:リレー
14	7月11日	模擬授業_2回目-⑤ A:リレー B:ハードル C:走幅跳
15	7月18日	模擬授業2回目の振り返り、全体のまとめ

### 3. 模擬授業の方法

模擬授業の経験は、学生たちにとって教科指導を体験する機会となり、自らの教員としての適性を考える機会を提供するものである。また、実践的指導力や授業運営力を身につけるための場としても貴重な機会と考えている。

#### 3-1. 展開方法

模擬授業は、43名を3グループ（A・B・C）に編成し、毎時間各グループ3名ずつ計

9名が教師役として模擬授業を行い、その他の学生は生徒役を務めた。模擬授業1時間（45分）に含まれる学習過程は「導入」「展開Ⅰ」「展開Ⅱ」とし、各15分間に設定した。学生は1人2回の模擬授業を行うが、このうち最低1回は「展開Ⅰ」または「展開Ⅱ」を担当するようにした。

本授業全体（90分）の過程は表2の通りである。1人目の教師役学生aが15分の「導入」を行った後、生徒役学生は教師役生徒aの授業について、所定の評価票を用いて評価を行う。この時間は5分間とした。「展開Ⅰ」「展開Ⅱ」も同様に行った。模擬授業（45分）および本授業（90分）の学習過程については、模擬授業1回目、2回目ともに同様の構成とした。

表2. 「保健体育科教育法（陸上）」の授業構成（例：2時限目の場合）

時間	授業過程		
10:40-10:55	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模擬授業担当者の確認。</li> <li>・模擬授業担当者から各グループ内の生徒役学生へ学習指導案の配布。</li> <li>・担当教員から評価票を全員に配布。</li> </ul>		
10:55-11:55	・模擬授業の実施		
	担当者	段階（学習過程）	内容
	教師役学生a	【導入：15分】 10:55-11:10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集合、整列、挨拶、出欠確認、体調把握。</li> <li>・本時の流れを説明。</li> <li>・ウォーミングアップ（体づくり、前時の復習、実施する種目特性に応じた内容）</li> </ul>
	(5分間) 生徒役の学生が教師役学生aの模擬授業の評価をする。教師役学生Bの授業準備。		
	教師役学生b	【展開Ⅰ：15分間】 11:15-11:30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各種目の指導，デモンストレーション。</li> <li>・最後は、まとめ・評価をして終了する。</li> </ul>
(5分間) 生徒役の学生が教師役学生bの模擬授業の評価をする。教師役学生Cの授業準備。			
教師役学生c	【展開Ⅱ：15分間】 11:35-11:50	【展開Ⅰ】と同様。	
(5分間) 生徒役の学生が教師役学生cの模擬授業の評価をする。全員で片付け。			
11:55-12:10	・講評：授業担当者による講評。授業展開や扱った教材内容の指導方法などに関する指導。		

### 3-2. 段階的な学習過程

学生は模擬授業を行うに当たり、指定されたグループ、授業担当日、実施単元（種目）に従い、担当する15分間の学習指導案を作成する。グループ等については、授業1週目と9週目にプリントを配布し学生たちに伝えた（表3）。なお、学生に提示した到達目標および学習課題は、中学校学習指導要領（平成29年3月）に基づき担当教員が設定した。

模擬授業1回目については、表3にあるように1) グループ、2) 授業担当日、3) 実施単元（種目）、4) 到達目標、5) 到達目標に合った学習課題、を事前に提示した。その上で、学習課題に対する15分間の活動内容と方法を考え、学習指導案を作成することとした。模擬授業2回目では、上記のうち1)～4)までは担当教員が提示し、学習課題と学習課題に対する活動内容および方法については、当日の担当者3名で相談するよう指示した。

現場の教員が授業実施までにたどるプロセスを学生たちに経験させようとした場合、実施単元の単元計画の立案・作成から到達目標および学習課題の設定、さらにその活動内容を考えるまでを含む必要がある。しかし、2回の模擬授業を通じて競技特性もルールも異なる2種目を担当すること、学生たちにとって「保健体育科教育法（陸上）」が実技科目を扱う最初の教科指導法の科目であること、全員に2回の模擬授業を経験させるための時間的限界を考慮し、活動内容を考える上での基礎的情報は提示しておくようにした。模擬授業2回目の担当表を配布した際、多くの学生は1回目とは異なり学習課題が示されないことに戸惑い、到達目標に即した活動内容を決定するのに時間を要していた。

表3. 各種目の本時の到達目標と各学習過程の内容

グループ	実施日	種目	学生ID	到達目標/過程	学習課題
A	①5/2	リレー	到達目標		適切なバトンパスの距離をみつけ、スムーズにバスを行うことができる
			1	導入	本時の説明・運動特性に応じたW-up・体づくり
			2	展開Ⅰ	バトンパスの基本・受け渡し
			3	展開Ⅱ	ゴーマークの設定
	②5/9	ハードル	到達目標		スピードを落とさずに、勢いよくハードルを跨ぎ越すことができる
			4	導入	本時の説明・運動特性に応じたW-up・体づくり
			5	展開Ⅰ	リズム良くインターバルを走る
			6	展開Ⅱ	遠くから勢いよくハードルを跨ぎ越す
	③5/16	走幅跳	到達目標		リズムカルな助走から、スピードを落とさずに跳び上がりはさみ跳びができる
			7	導入	本時の説明・運動特性に応じたW-up・体づくり
			8	展開Ⅰ	踏切前3～4歩からリズムアップして踏み切る
			9	展開Ⅱ	実測測定
	④5/23	走高跳	到達目標		素早い踏切から、跳躍することができる
			10	導入	本時の説明・運動特性に応じたW-up・体づくり
			11	展開Ⅰ	色々なジャンプの実践
12			展開Ⅱ	リズムカルな助走からのはさみ跳び	
⑤5/30	砲丸投	到達目標		立ち投げから、効率よく力が伝わるよう砲丸を突き出すことができる	
		13	導入	本時の説明・運動特性に応じたW-up・体づくり	
		14	展開Ⅰ	砲丸投のルール/砲丸に慣れる	
		15	展開Ⅱ	突き出し・立ち投げ	

## 4. 模擬授業実施までの学習プロセス

模擬授業実施までの準備期間には、模擬授業の実施場所や用具の確認、学習指導案の作成などの活動が必要となる。特に、扱う教材（種目）への理解が十分でない学生たちにとって学習指導案の作成は難しく、多くの学生がもっとも苦勞する活動のひとつである。また、担当教員にとってもどのように指導するのが効果的か、頭を悩ませる活動である。

模擬授業実施においては、学習指導案の作成（Plan）、模擬授業の実施（Do）、模擬授業の評価（Check）、学習指導案の改善（Action）のサイクルを念頭に置き、学生たちが一連のプロセスを通じて学習指導案の作成能力を高めるとともに、授業運営力や実技指導力を高められるよう心掛けた。また、2018年度からの新たな試みとして、模擬授業前後には個別の対面指導（以下、対面指導とする）を行うこととした。この理由は、教職を目指す学生にとって学習指導案の作成が壁になっていること（黒須、2017）<sup>9)</sup>、さらにこの状況を克服する指導方法のひとつとして対面指導の教育的効果が報告されているからである（白石、2013）<sup>10)</sup>。

### 4-1. 模擬授業準備から模擬授業報告書の作成まで

模擬授業準備から実施までの流れについては、本授業の1週目に資料（後掲 資料1）を配付し説明した。本授業では、学生たちが経る学習プロセスを「事前」「当日」「事後」の3段階にして準備した。表4は2017年度と2018年度との比較表である。

事前段階において教師役学生は、「学習指導案の作成」→「学習指導案の提出（7日前）」→「修正指導案の受け取り（5-2日前）」→「個別の対面指導（5-2日前）」というプロセスを経る。当日は、「本番用指導案の配布」→「模擬授業実践」→「評価票の受け取り」→「担当教員からの講評」を受ける。事後段階では「授業報告書の作成（1週間以内）」→「模擬授業に関する振り返りと個別の対面指導（1週間以内）」というプロセスを経ることとなる。

対面指導は10～30分程度と個人によって異なる。事前段階にあたる授業指導案作成時には、複数回に渡って指導を受けに訪れる学生もいた。

表4. 模擬授業担当者の学習プロセス

学習プロセス	2017年度	2018年度
事前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導案の作成</li> <li>・授業担当教員に学習指導案を提出（7日前）</li> <li>・授業担当教員から修正指導案を受け取る（5-2日前）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導案の作成</li> <li>・授業担当教員に学習指導案を提出（7日前）</li> <li>・授業担当教員から修正指導案を受け取る（5-2日前）</li> <li>・修正指導案をもとに個別に指導を受ける（5-2日前）</li> </ul>
当日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修正した指導案をグループの人数分コピーし、模擬授業時に配布する</li> <li>・模擬授業を行う</li> <li>・生徒役学生が記入した評価票を受け取る</li> <li>・授業担当教員から講評を受ける（受講者全員）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修正した指導案をグループの人数分コピーし、模擬授業時に配布する</li> <li>・模擬授業を行う</li> <li>・生徒役学生が記入した評価票を受け取る</li> <li>・授業担当教員から講評を受ける（受講者全員）</li> </ul>
事後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価票に記された評価内容を転記し、「模擬授業報告書」を作成し、提出する（1週間以内）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価票に記された評価内容を転記し、「模擬授業報告書」を作成し、提出する（1週間以内）</li> <li>・模擬授業のフィードバックを個別に行う（1週間以内）</li> </ul>

### 4-2. 対面指導の試み—事前指導にみる学生のみならず

表4に示したように、教師役学生には模擬授業を担当する1週間前までに学習指導案を提出するよう義務づけている。担当教員は、提出された9人分の学習指導案に目を通し修正点を記入し、提出の2日

後から対面指導および学習指導案の返却を開始した。対面指導を通じて明らかとなった学生たちのつまづきは、概ね5つに分けることができた。1) 与えられた到達目標や学習課題に対する活動内容および実施方法が分からない、2) 学習指導案のどこに何をどのように書けばいいのか分からない、3) 活動内容に適した用具の設定（距離・高さ・重さ等）が分からない、4) 活動内容に即した場の設定を図示することができない、5) 活動内容と評価規準が合致しない、であった。

上記5つのうち最も多くの学生にみられたのが、「1) 与えられた到達目標や学習課題に対する活動内容および実施方法が分からない」であった。具体的には、ハードル走において、「遠くから勢いよくハードルを走り越す」という学習課題に対し、どのような方法を用いて練習すれば「遠くから踏み切れるのか」「勢いを落とさずにハードルを走り越せるのか」が分からない、というものである。

中学校学習指導要領（平成29年公示）解説・保健体育編（以下、中学校学習指導要領解説とする）には、各分野の目標および内容として、(1) 知識及び技能、(2) 思考力、判断力、表現力、(3) 学びに向かう力、人間性等身、がそれぞれ示されている。このうち(1) 知識及び技能には、習得させるべき目標と内容、内容に対する例が示されている。例えばハードル走の場合には以下の通りである。

#### ウ ハードル走

ハードル走では、ハードルを越えながらインターバルを一定のリズムで走り、タイムを短縮したり、競走したりできるようにする。

リズムカルな走りとは、インターバルにおける素早いピッチの走りのことである。

滑らかにハードルを越すとは、インターバルで得たスピードで踏み切って、余分なブレーキをかけずにそのままのスピードでハードルを走り越えることである。

指導に際しては、ハードル走の距離は50m～80m程度、その間にハードルを5台～8台程度置くことを目安とするが、生徒の体力や技能の程度やグラウンドの大きさに応じて弾力的に扱うようにする。

<例示>

- 遠くから踏み切り、勢いよくハードルを走り越すこと
- 抜き足の膝を折りたたんで前に運ぶなどの動作でハードルを越すこと
- インターバルを3又は5歩でリズムカルに走ること

中学校学習指導要領解説には、指導に際しての距離や台数、さらにその内容（学習課題）の例示はなされているが、例にある内容を習得させるためにどのような方法を用いて活動させるのか、どのような教材の工夫が必要なのかについては示されていない。そのため、遠くから踏み切れるようにしたい、勢いよくハードルを走り越せるようにしたいと思っても、そのための方法が分からずに学習指導案が作成できない学生が多くみられた。インターネットや書籍等で調べてくる学生もいるが、対象生徒の特性、人数、場所、用具を考慮せずに紹介されている方法をそのまま用いる学生も多く、模擬授業がうまく行かない場面が随所に見受けられた。現場の教員は、本時の到達目標とそれを達成させるための学習課題を設定し、学習課題を克服するための活動内容と方法を考え授業を立案する。しかし学生たちは、陸上競技に関する基礎的知識の不足、運動特性への理解不足、経験の少なさが要因となって到達目標に合わせた授業の立案ができない現状にあった。また、学習指導案作成前に自らが構想した活動内容を実際に試した学生はほとんどいなかったことも、適切な活動内容が設定できない要因としてあげられる。

上記の状況から、事前段階での対面指導のほとんどが、学習課題を習得させるための活動内容と具体的な方法を教示する時間となった。その際には口頭のみで説明するのではなく、実技を交えたり、学生の考えてきた活動内容を本番になぞらえて試行させたりすることによって、授業を実践的にイメージして考えることができるように指導した。

### 4-3. 対面指導の試み—事後指導からみえるもの

昨年度（2017年度）まで、模擬授業後の指導は受講者全体に向けた講評に留まっていたが、今年度は模擬授業までの一連の活動を個別に振り返る機会を設けた。これにより、学生自身の自己評価と生徒役学生による評価、そして担当教員による評価という3方向から模擬授業を振り返り、次回に向けた課題を明確にすることができた。模擬授業後の対面指導は、担当教員からの一方的な評価に留まらず学生が自らの準備過程や当日の言動を省察する機会となり、「できること」と「できないこと」を明確にする場として有用に作用したと思われる。

学生からあげられた模擬授業における失敗は、1) 時間が足りなかった、2) 実際にやってみたら思っていた距離や高さではできなかった、2) 見本が見せられなかった、3) 状況に応じて活動内容を変えることができなかった、4) 生徒に対する声かけができなかった、などであった。こうした声に対し、なぜ上手くいかなかったのかを学生自らに考えさせて気づかせること、その上で次回はどうのように展開すべきかを共に考えることが、教材理解を含めた学習指導案作成能力や授業運営力の向上、さらには教職に対するモチベーションを高めることにも繋がると思われる。

## 5. 模擬授業を通じた学生の学び～報告書の記述から～

ここまで授業の内容やその実施方法について述べてきたが、模擬授業を含む一連の学習プロセスを通じて、学生たちは何に気づき、何を考えたのであろうか。本節では、模擬授業を通じて得られた「学び」について、学生たちの声を手掛かりに考えてみたい。検討資料として、学生が提出した「模擬授業報告」にある「実践を振り返って」をもちいた。時間的限界もあり受講者全員を対象とする検討には至らなかったため、本稿では模擬授業評価において、担当教員からも学生間評価でも高評価を得た5名の記述を取り上げて考えることとする（表5）。

### 5-1. 学生たちの思考の展開～「難しさ」が指す内容の変化～

「実践を振り返って」の中で、5名以外にも多くの学生があげていたのは「授業をすることの大変さや難しさを感じた」であった。思い通りに行かない授業経験とそこでの気づきが、学生たちに教職という仕事の一側面を現実味をもって伝え、学生自身の学びの始まりになったのであろう。学生のコメントからは、「授業の難しさ」というキーワードが示す内容が、単純な授業運営や進行の難しさを示す内容から、学習者（生徒）の学習成果や楽しさを実感させる授業を求めるがゆえの「授業の難しさ」に変化していることが読み取れる。

学生dは、教員がただ授業をやればいいのかではなく生徒に伝わらなければ教えているとは言えない、と指摘している。学生eもまた、ただ跳ばせるだけ、走らせるだけの授業にならないためにどのように理解させるのか、どんな工夫をしたら理解し易いのか、という教授方法の難しさに思考を巡らせている。

＜学生d＞模擬授業を振り返って一番感じたことは、授業をすることの大変さと難しさである。ただ授業をやればいいのかというわけではなく、そこにはそれなりの準備と知識が必要だ。自分が分かっていないと教えられないというのは当然のことであり、プラスアルファ、自分が分かっていたとしても、生徒に伝わっていないければそれは教えたということにはならず、ただの教師の自己満足に過ぎない。

＜学生e＞まず自分が今回担当した走高跳にしてもハードルにしても、教材研究からはじめて、何が大切なのかどこを生徒に重要視させたらいいのか、インターバルや注意すべき点などたくさん考えることがあった。授業をすることの大変さをまず感じる事ができた。今回は大学生が

生徒役をしたが、実際の対象は小学中学高校生である。まずはしっかり理解させないと、ただ跳んでるだけ、ただ走ってるだけになってしまうので、彼らにどうやって工夫すれば理解しやすいのか、言葉遣いや言語のチョイスなども考えていくべきだ。

表5. 「実践を振り返って」に記された学生の記述

	学生たちの声
d	3回の模擬授業を振り返って一番感じたことは、授業をすることの大変さと難しさである。ただ授業をやればいいというわけではなく、そこにはそれなりの準備と知識が必要だ。自分が分かっていないと教えられないというのは当然のことであり、プラスアルファ、自分が分かっていたとしても、生徒に伝わっていなければそれは教えたということにはならず、ただの教師の自己満足に過ぎない。今回は運動がある程度できる学生が相手であったこと、また、生徒数は実際の約半分程度であったことなど、実際の現場とはかなり違う状況だ。その中で、準備が不足していたり、指導者としてきちんと教えることができないというのは、もっと危機感を持たなければいけないことのように思う。自分の想定とは違ったことが起こるのが当然の学校現場で、そういったことにも当たり前のように対処できるだけの力をつけなければならない。まだまだ経験値が足りない。もっともっと実戦経験を積み、できて当たり前のことややること、そしてプラスアルファで生徒を引き込むような授業を展開できるようになりたい。今回の模擬授業を通して、授業をすることの難しさを感じられたことで、自分に足りていないことを発見することができたことが、一番の収穫だ。より高いレベルの教員を目指し、今以上の学びが必要だと感じた。
e	初めて陸上という分野の教師になって模擬授業を行って、専門競技ではないのでやはり難しい部分はたくさんあった。まず自分が今回担当した走高跳にしてもハードルにしても、教材研究からはじめて、何が大切なのかどこを生徒に重要視させたいのか、インターバルや注意すべき点などたくさん考えることがあった。授業をするということの大変さをまず感じる事ができた。今回は大学生が生徒役をしたが、実際の対象は小学中学高校生である。まずはしっかり理解させないとただ跳んでるだけ、ただ走ってるだけになってしまうので、彼らにどうやって工夫すれば理解しやすいのか、言葉遣いや言語のチョイスなども考えていくべきだ。生徒たちの体調管理やホイッスルなど細かい部分も大切にしていきたい。今回良かった点や悪かった点をしっかり反省し、模擬授業して担当していないリレーや走り幅跳びなどの授業研究をしていきたい。良い経験ができた。
f	指導案については、何回か提出する中で「ここはもっとこうしたほうがいい」とか「何を、何回、どのように行うか」など指導案のポイントについて学び、そして実践することができた。今後他の授業でも教育実習での指導案は書くと思うので今回得た知識を参考にしたい。模擬授業では、改めて模擬授業の難しさを実感したとともに自分の経験の無さを痛感した。授業の始まりから終わりまでの連続性や、何を習得させたいのか、そのためにはどんな授業を展開するのがベストなのか、実際に模擬授業をしてみないと気付けなかったことがたくさんありとても参考になった。またこのような模擬授業が経験できる機会はあまりないのでいい経験になった。指導者側に立って自分(教師側の人)が楽しく授業をしているとそれが生徒にも伝わって生徒も楽しめる。結果、充実したよりよい授業が展開できる。と感じた。生徒の評価やアドバイスの仕方、授業の雰囲気づくり、授業計画、指導案作成など至らないところばかりだが、まずは自分自身が楽しみ一生涯に授業に取り組み、専門性を身につけていきたい。また、常に学び続けて日々精進していきたい。
g	15回の授業を通して、専門性の高い授業を展開することの大変さ、臨機応変に対応したり、的確な評価やアドバイスをすることの難しさ、イメージ通りに生徒に伝えることができた時の喜びを体感することができた。また、環境によって、生徒への支持する場所の工夫や、目を向ける角度を変えるなど、生徒の立場だった時には、考えていなかった工夫も知ることができ、とても勉強になった。指導案を作成する時、頭で考えるだけではなかなか案が浮かばず、実践すること、仲間と協力することの大切さを学んだ。実際に授業を進めてみると、生徒の表情や、雰囲気から、多くのことを察する事ができ、その場で改善、工夫することがとても重要であると思った。私はもともと声が高く早口なところがあるため、ただ大きな声で指示していると、実際に伝えたい事が生徒の耳に届かないことを痛感した。なので、話し方に強弱をつけたりゆっくりと話す事、話す時の環境を整える事、手本を示し、視覚的理解を得る事など様々な工夫が必要であると思った。教員として前に立ってみると、部活やクラブなどで後輩に指導するのは全然違う感覚でとても楽しかった。陸上で専門性をもっと高め、生徒から一目置かれるような体育教員を目指したい。そして、今回の授業で学んだ、多くのスキルを今後多くの場面で活かしていけるよう、努力したいと思う。
h	2回の模擬授業を終えて、1つの授業を行うのに、教材研究や指導案作成などこれだけの時間がかかるのだと実感した。模擬授業を行う1週間前がハラハラドキドキで、練習を重ねれば重ねるほど緊張がなくなり、自信をもって臨めると感じた。実際の授業は、ほとんど自分の思っている通りにはいかなくて、想定外のことが起きた時にどれだけ柔軟な対応ができるかが大切だと思った。指導案通りにやろうとすると、ただの詰め込み教育になってしまう。生徒の言葉や動きから、本音を読み取り、生徒のことを第一に考えて授業ができる生徒のためになると感じた。今回は、普段一緒に授業を受けている仲間が生徒役ということで、間違っても笑ってくれたり、困っているときに助けてくれたりと、授業しやすい環境が自然とできていたが、本当ならば、性格や特徴を全く知らない生徒に対して授業を行うため、一人で授業を行うように感じると思う。どんな雰囲気の中でも自分のやりたい授業ができるようにして、生徒のやる気を出させる楽しい授業にしたいと思った。陸上の模擬授業で、体育教師の現実や、厳しさ、楽しさ、やりがいを感じる事ができたので、ほかの科目の模擬授業でも、この経験を生かしていこうと思いました。ありがとうございました。

さらに学生 f は、「何を習得させたいのか」「そのためにどんな授業展開が良いのか」など、授業全体の連続性にも考えが及ぶようになっている。学生 g のように、模擬授業を通じて自分の声の聞き取りにくさを感じるにより、生徒に伝えたいことを伝えるための方法を模索し始めた者もいた。

＜学生 f＞模擬授業では、改めて模擬授業の難しさを実感したとともに自分の経験の無さを痛感した。授業の始まりから終わりまでの連続性や、何を習得させたいのか、そのためにはどんな授業を展開するのがベストなのか、実際に模擬授業をしてみないと気付けなかったことがたくさんありとても参考になった。

＜学生 g＞私はもともと声が高く早口なところがあるため、ただ大きな声で指示していると、実際に伝えたい事が生徒の耳に届かないことを痛感した。なので、話し方に強弱をつけたりゆっくりと話す事、話す時の環境を整える事、手本を示し、視覚的理解を得る事など様々な工夫が必要であると思った。

上記の学生 d～g とは異なる角度からの意見として学生 h は、生徒の様子を考慮せずに指導案通りに進めようとする事への違和感を感じ取り、何が「良い授業」なのかを自分なりに模索している様子がかがえる。これは、対象とする生徒の習熟状況や気象状況などの環境的要因によって、臨機応変に活動内容を変化させることの重要性を身をもって感じた結果であろう。

＜学生 h＞実際の授業は、ほとんど自分の思っている通りにはいかなくて、想定外のことが起きた時にどれだけ柔軟な対応ができるかが大切だと思った。指導案通りにやろうとすると、ただの詰め込み教育になってしまう。生徒の言葉や動きから、本音を読み取り、生徒のことを第一に考えて授業ができると生徒のためになると感じた。

学生たちは、授業を「受ける側」から「する側」に立場を代えたことによって、初めて授業が準備の積み重ねによって成り立っていることに気がついたのであろう。「授業の難しさ」を感じる事が学生たちの「学び」のきっかけとなり、模擬授業を重ねる中で、単純に「授業が上手くできない」という難しさから、「どのように理解させるか、伝えるか」に難しさを感じるようになっていったことが読み取れる。

## 5-2. 模擬授業を通して描く理想の授業

模擬授業とはいえ教師として授業を行うという経験は、学生たちが自分になりたい教師の姿や目指す授業を現実味をもって考える場として機能したと考えられる。以下のコメントからは、自らが目指す保健体育の授業や教師像が垣間みえる。

＜学生 a＞自分の想定とは違ったことが起こるのが当然の学校現場で、そういったことにも当たり前のように対処できるだけの力をつけなければならない。まだまだ経験値が足りない。もっともっと実践経験を積み、できて当たり前のことをやること、そしてプラスアルファで生徒を引き込むような授業を展開できるようになりたい。

＜学生 c＞指導者側に立って自分（教師側の人）が楽しく授業をしているとそれが生徒にも伝わって生徒も楽しめる。結果、充実したよりよい授業が展開できる。と感じた。生徒の評価やアドバイ

スの仕方、授業の雰囲気づくり、授業計画、指導案作成など至らないところばかりだが、まずは自分自身が楽しみ一生懸命に授業に取り組み、専門性を身につけていきたい。

<学生 d> 陸上での専門性をもっと高め、生徒から一目置かれるような体育教員を目指したい。そして、今回の授業で学んだ、多くのスキルを今後多くの場面で活かしていけるよう、努力したいと思う。

<学生 e> (仲間が生徒役ということもあって授業しやすい環境が自然とできていたが) 本当ならば、性格や特徴を全く知らない生徒に対して授業を行うため、一人で授業を行うように感じると思う。どんな雰囲気の中でも自分のやりたい授業ができるようにして、生徒のやる気を出させる楽しい授業にしたいと思った。

授業をすることの大変さや難しさを痛感し、模擬授業における失敗の原因追及（Check）と次回に向けた改善（Action）を行う過程が、教職に対する意識の変化、模擬授業での成功体験をもたらし、教えることの喜びを実感させることに繋がったのではないだろうか。また、自分自身の教師像についても、現場に立つことによって初めて描けるようになるのであろう。「指導案を作成する時、頭で考えるだけではなかなか案が浮かばず、実践すること、仲間と協力することの大切さを学んだ」という学生 D のコメントからは、授業を通じて机上と現場を行き来することや人から学ぶことの大切さに気づいたことが読み取れる。

## 6. おわりに

本稿の目的は、2018 年度開講の「保健体育科教育法（陸上）」の授業内容について報告するとともに、学習指導案作成時の学生たちのつまずきと本授業の学習効果について検討することであった。

今年度は学習プロセスのひとつに模擬授業前後の対面指導を取り入れ、授業を展開した。1 人ひとりと対話していく中で、学習指導案の作成に苦戦する要因について掴むことができた。本文中では 5 つの要因を示したが、最も大きな要因として「与えられた学習課題に対する活動内容および実施方法が分からない」をあげることができる。学習指導要領にも目標と内容は示されているが、それをどのようにして行うかという方法論については示されていない。他方、1 年次の教職必修科目である「スポーツ方法学実習」ではルールや方法論について実践を通じて学んでいる筈であるが、そもそも 2 年後に必要な知識として捉えて受講している学生も少なく、1 年次の学びが生かされないという問題もある。こうした状況の中で、学生をつまずきを少しでも解消する方法として、時間を掛けた個別の対面指導は有用であったといえよう。しかしながら、43 名の学生に対し対面指導を実施することは、教員の時間的な拘束や負担を増大させるという課題もある。丁寧な個別指導を充実させる一方で、学生がより質の高い学びを得るためには 1 年次の「スポーツ方法学実習」と 3 年次「保健体育科教育法」にこれまで以上の連続性を持たせる仕組み作りも必要であろう。さらにいえば、学習指導要領に示されている学習内容や例示を実際に行うための具体的な方法論について、体系的に示していくことが求められる。

ともすれば、体育という授業は、ただ走らせているだけ、跳ばせているだけ、投げさせているだけの「何も教えない授業」に成りかねない。その危険性を回避するためにも保健体育教員養成課程を専攻する学生には、「専門性」を意識させることが重要だと考える。それは、保健体育教員でなければできない授業をすることである。そのためには体育学やスポーツ科学のエビデンスに加え、動き方のコツや目標とする動きを表現するためのポイントなど、学校現場で活用することのできる実践知を身につけ

せることも重要である。このことは、実践的指導力の基礎を育成するという教員養成大学に求められた要請に応えるという点でも、本授業の課題のひとつといえよう。

他方、本授業の学習効果については「実践を振り返って」から読み取ることができた。2回の模擬授業や他の学生の授業を受けるという経験を通して、学生たちは「こんな授業をしたい」「こんな授業ができる教員になりたい」という具体的な教師像が描けるようになっていった。学習指導案の作成や模擬授業を通じて自らの理想とそれに近づくための課題が明確にされたことは、本授業における学習効果といえる。また、理想とする教師の具現化を目指すことは、教職を目指す上でのモチベーションの向上にも繋がると考えられる。

## 注および引用・参考文献

- 1) 文部科学省「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm) (2018年9月9日, 最終閲覧日)
- 2) 文部科学省「これからの学校教育をになう教員の資質向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」<簡略版>, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/03/25/1365896\\_03.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/03/25/1365896_03.pdf) (2018年9月9日, 最終閲覧日)
- 3) 白石晃(2013) 教員養成教育における模擬授業の取り組み—「保健体育科指導法2」の授業実践から—, 天理大学学报, 第64巻 第3号; 99-123.
- 4) 高橋健夫は, 「よい体育授業とは, つきつめて考えると『目標が達成され, 学習成果が十分に上がっている授業である』」とし, 「よい体育授業は端的に言って『学習の勢い』があり, 『学習の雰囲気』がよいと指摘している. 高橋によると「学習の勢い」とは, 「授業マネジメント」「学習の規律」といった条件が整っていて, 一授業時間中の学習量や学習密度が高いということであり, 「学習の雰囲気」とは, 子どもが情意的に解放されていて, 仲間との肯定的な人現関係に支えられていることだという. 一方で「体育の目標は, 体育の基本的な立場によって異なった側面が強調されるため, 立場が違えば異なった『体育授業像』が描かれることになる」ことにも言及している. 高橋健夫「よい体育授業の条件」, 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著『新版 体育科教育学入門』, pp.48-53, 大修館書店, 2010.
- 5) 秋田美代・斉藤昇(2010) 算数・数学担当教員を目指す教員養成大学学生の学習指導案作成能力の向上に関する事例研究, 教育実践研究, 第12巻 第1号; 11-20.
- 6) 渡部洋一郎(2018) 学習指導案作成に関わる要因とその効果, 上越教育大学国語研究, 第32巻; 13-22.
- 7) 黒須雅弘・木村華織(2017) リアリティーのある模擬授業の実施方法—「保健体育科教育法(陸上)」の授業報告—, 東海学園大学教育研究紀要スポーツ健康科学部, 第3号; 77-85.
- 8) 黒須雅弘・木村華織(2016) 体育授業(陸上競技)づくりの実践学習—「保健体育科教育法(陸上)」の授業報告—, 東海学園大学教育研究紀要スポーツ健康科学部, 第2号; 72-77.
- 9) 前掲7参照
- 10) 前掲3参照

